

日本学術会議会長談話

年頭挨拶 ～日本学術会議 70 周年を迎えて～

新年あけましておめでとうございます。

今年は亥年です。猪突猛進と言われるように、イノシシにはあまり深い配慮をせずひたすら前へ突き進む、というイメージがあります。私もアフリカの熱帯雨林でカワイノシシの群れに出会って、怖い思いをしたことがあります。100 頭を超える大群でしたが、リーダーのオスはたった 1 頭で私に向かって突進してきました。赤っぽい毛色で、耳が白く、その先の長い毛が風にひらめき、雷神のように見えました。鋭い牙にかかったら、命も危ないと思い、急いで大樹の陰に隠れましたが、その後もオスはしつこく私の方へ向かってきたことを覚えています。メスや子どもたちを背後に抱えていますから、イノシシのオスは警戒心が強く、結構執念深いのです。

さて、イノシシには霊長類にはない特徴があります。それは子だくさんで、子どもの成長が早いということです。なにしろ、2 歳で性成熟に達し、妊娠期間は約 4 か月で、毎年春に子どもを平均 5 頭ほど産みます。近年、イノシシの農産物被害が急増し、全国で毎年 50 万頭を超える数が狩猟されているのですが、なかなか生息数も被害も減らないのはこのたくましい繁殖力と成長力によるものです。一方、同じぐらいの体重の類人猿や人間は一産一子、妊娠期間も長く、性成熟もずっと遅いので、イノシシに比べて少子の繁殖戦略を取ってきたと言えるでしょう。しかし、人間だけはいつの頃から出産間隔を短縮してたくさんの子どもを産めるような繁殖能力を身に付けました。これに、1 万 2 千年前に始まった食料生産、200 年前に始まった産業革命、数十年前の情報革命が人口の増加を加速させた結果、73 億人を超える人間圏を形成するに至ったのです。歴史を振り返ると、人間はますます猪突猛進的な生き方を強めていると言えるのかもしれませんが。

ただ、多産になっても人間の子どもの成長はむしろ遅くなり、寿命は延びています。イノシシの寿命は 10 年なのに、人間の子どもは成熟するまで 20 年近くかかり、最近では 100 歳を超える人が珍しくなくなりました。人間の進化は、人生をゆっくり生きるように設計されているのです。近年の経済を重視する生き方や、情報通信機器を過度に用いる生活は果たして人間の身体や心に合っているのかどうか、ここらで一度立ち止まって考え直す必要があると思います。

さて、日本学術会議はこの 1 月で 70 周年を迎えました。1949 年に発足以来、1 部から 3 部まで自然科学、人文・社会科学のすべての学術を網羅した研究者のコミュニティとして役割を果たしてきました。国際科学会議 (ICSU) と国際社会科学評議会 (ISSC) は、昨年になってやっと統合されて国際学術会議 (ISC)

として発足したのですから、日本学術会議は70年も前に先見の明があったことになります。1949年は湯川秀樹先生が日本で初めてのノーベル賞を受賞された年でもあります。明治維新以来、欧米諸国の先端科学に追い付こうとしてきた日本が、やっと世界に並び、そして世界を追い抜いたことを示した年なのです。奇しくも今この原稿を書いている私は、2018年のノーベル賞を受賞された本庶佑先生のお供で授賞式に出席しようとしています。本庶先生は26人目の日本人受賞者となりました。この70年間の日本の学術の輝かしい軌跡を誇りに思うと同時に、これからもこのような栄誉が与えられ続けるのだろうかという一抹の不安が頭をよぎります。

この20年間、日本の研究力は減退したと言われ続けてきました。そのきっかけはバブルの崩壊で日本の企業が中央研究所を縮小したことにはじまり、国立大学の法人化以降、毎年運営費交付金を減らして研究者の数と研究時間を削減してきたことにあると言っていいでしょう。将来研究者の道を歩む登竜門である博士課程への進学率が急速に落ちています。最近では、過去の日本のノーベル賞受賞者がこぞって基礎研究の重要性と、研究環境の充実を訴えています。今後も日本の学術が世界をリードする存在であり続けるために、日本学術会議は政府、産業界、社会と一体となって学術の強化を図らねばなりません。

そのために、私は「対話」を第24期の目標に掲げました。戦後、学術に対する社会の期待は今より強かったように思います。日本の人々は科学が明るい未来を拓くという大きな夢を抱いていました。東京オリンピックや大阪万博が開かれ、世界の人々との輪や文化の多様性、科学へのあこがれが広がりました。科学雑誌が次々に創刊され、先を争ってそれに目を通した記憶が私にはあります。日本の発明や製品が続々と世界に進出し、Japan as No. 1という言葉が世間に飛び交う時代でもありました。しかし、バブル以降は企業の倒産、合併、統合が相次ぎ、イノベーションが起こらないと言われるようになりました。科学雑誌も廃刊が相次ぎ、自然科学分野の研究者が英文の学術雑誌のみに研究成果を発表するようになって、科学の考え方や発見、発明の面白さを日本語で伝えるメディアが急速にやせ細った印象を受けます。それにともない、科学の成果ばかりに社会の関心が集まり、科学の基礎的な営みに対する興味が薄れてしまったのではないかと思います。とりわけ、未来を支える日本の青少年たちが学術への純粋な興味を持つ機会が少なくなっているような気がします。もっと、新しい、面白い考えをみんなでわいわい言いながら紡ぐ楽しさを、社会で広く共有する必要があるのではないのでしょうか。そのためにも、多様な「対話」が不可欠なのです。

ノーベル賞授賞式の最中、ポーランドではCOP24が開催され、地球の平均気温の上昇に対して大きな懸念が表明されました。国連環境計画（UNEP）が発表した2018年度版の「排出ギャップ報告書」によると、世界の二酸化炭素（CO₂）総排出量は4年ぶりに増加しており、気候変動に対する国際的な取り組みが、目標とする水準に達していないと指摘されています。2015年パリ協定が定めた

目標を達成するには、世界の CO2 排出量を 2020 年までに減少へと転じさせる必要がありますが、2030 年でさえそれは難しいとされているのです。日本に限らず世界各地で最近では温暖化の影響と思われる台風やハリケーンの大型化、火災の発生、地震や津波などが相次いでいますが、日本学術会議は世界の科学者と連携を組んで地球環境の劣化を防ぐ方策を緊急に立てねばなりません。すでに日本学術会議でも、防災・減災に関する委員会は日本の研究者コミュニティをまとめ、緊急の事態に際して迅速に行動できるような体制を作りつつあります。フューチャー・アースの推進と連携に関する委員会も活発に活動を展開しています。このほか、この 3 月 6 日に日本学術会議が開催する S20 では、世界各国のアカデミー代表者とともに海洋環境の保全、とくに海洋プラスチックごみの問題を扱う予定です。

第 24 期はこれまでに、文部科学省、環境省、スポーツ庁から審議依頼を受け、政府が抱える重要課題について新たに委員会を設けて検討してきました。また、科学と社会委員会の下に政府・産業界との連携を目指す分科会やメディアとの連携を目指す分科会を立ち上げて、さまざまな「対話」の新しい方法を模索してきました。2030 年と 2050 年の日本の学術を見通すべく、幹事会を中心に日本の展望 2020 検討委員会を組織し、世界の学術の課題や日本の学術の強みや弱みを見据えた上で、いくつかのシナリオを描いてみようと思っています。これからその話し合いをはじめますが、4 月の総会でそのコンテンツは紹介できるだろうと思っています。どうぞご期待ください。

限られた時間や予算の中、猪突猛進してきたこれまでの科学の歩みを反省しつつ、今年は、カワイノシシのように、しつこく執念深く、熟議の年としたいと思います

どうぞ、よろしく願いいたします。

平成 31 年 1 月 21 日

日本学術会議会長 山極 壽一